



ベネッセの生成AI教育戦略： ヒューマンセントリック・アーキテクチャの解剖

圧倒的なデータ資産といかにして「人間中心のAIエコシステム」を構築したか

教育DXのパラダイムシフト：単なる効率化から「構造的変革」へ

従来のIT導入

予定的な字書



...



字字本書



業務の代替と効率化

生成AIによるパラダイムシフト



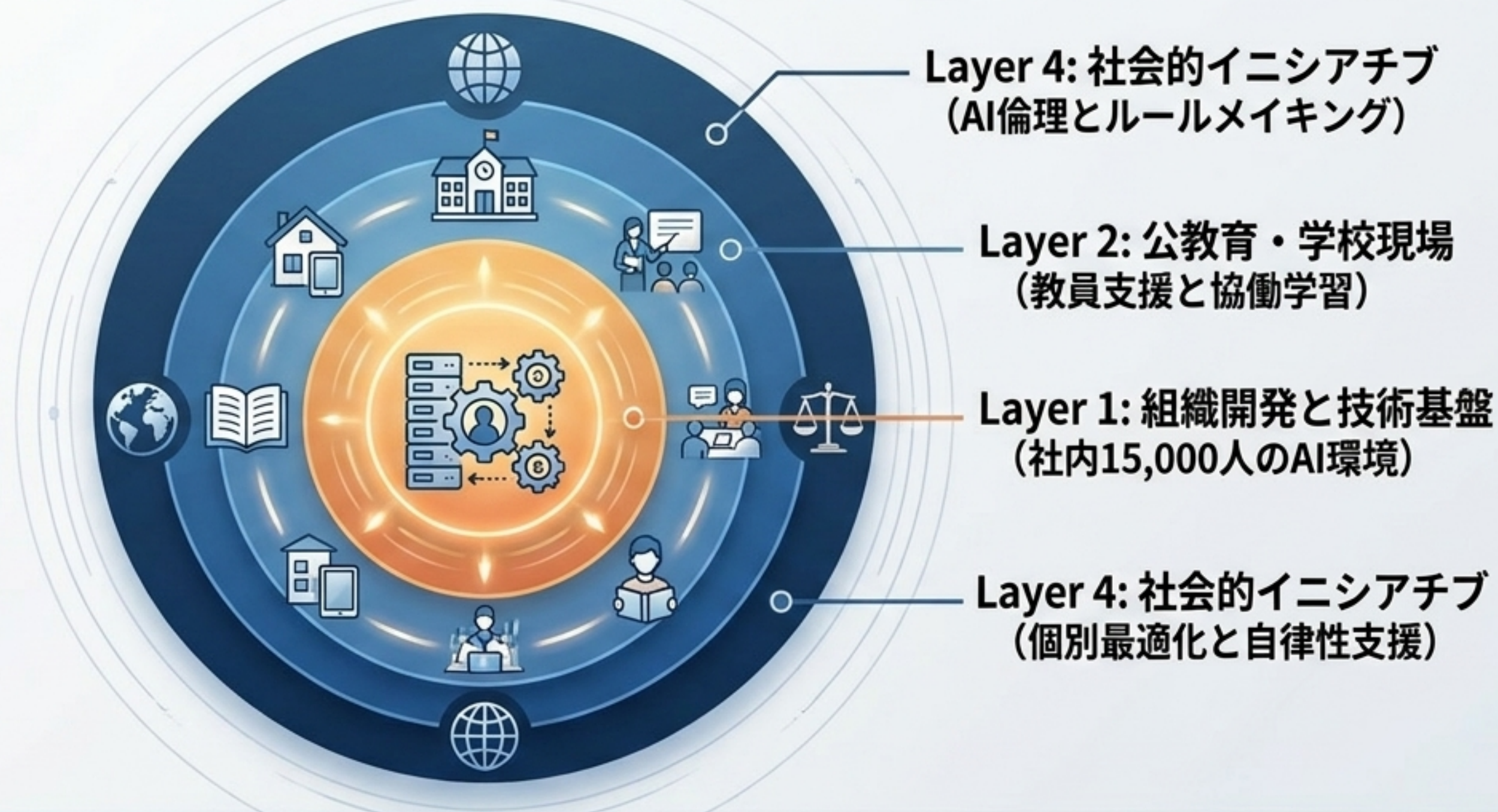
学習の
個別最適化

教員の
職能再定義

知識の共創

生成AI（LLM）の台頭は、教育提供価値の根本的な再定義を迫っている。ベネッセはこれを「いのちを歓喜させるまなびへ」というパーパス実現のための、**不可逆的な中核技術基盤**として位置付けている。

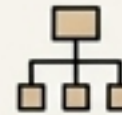
4次元の戦略展開：内発的変革から社会的ルールメイキングへ





ベネッセのAI実装は、単発のプロダクト開発ではない。強靱な社内DXを起点とし、学校、家庭、そして社会全体へと波及する統合的かつ同時並行的なエコシステム戦略である。

Layer 1 [Core] : 「変革の触媒」として機能する1,200名のDX推進体制



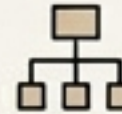
 **体制:** 社長直下の特命組織として
1,200名の高度DX人財を集約。


 **役割:** 分断されていたIT・人事・事業
を統合する「変革の触媒」。

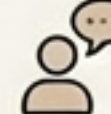
 **成果:** 戦略立案からシステム運用まで
を一気通貫し、BPR（業務プロセス再
設計）を通じて投資余力を創出。

Layer 1 [Core] : 教育インフラの絶対条件を満たす「Benesse GPT」



 2023年4月より、全従業員15,000人を対象にクローズドAI環境を展開。

 データレジデンシの確保: 児童・生徒の機微なデータを国外に出さない国内処理の徹底。

 カルチャー・シフト: 定型業務 (社内問合せ対応等) を自動化し、全社的なAIリテラシーとデータドリブンな意思決定文化を醸成する「安全な砂場」。

Layer 2 [B2G/B2B] : 業務負担削減と品質を両立する「Human-in-the-Loop」



課題

課題: 教員の長時間労働と、高頻度なテスト実施のジレンマ。

解決策

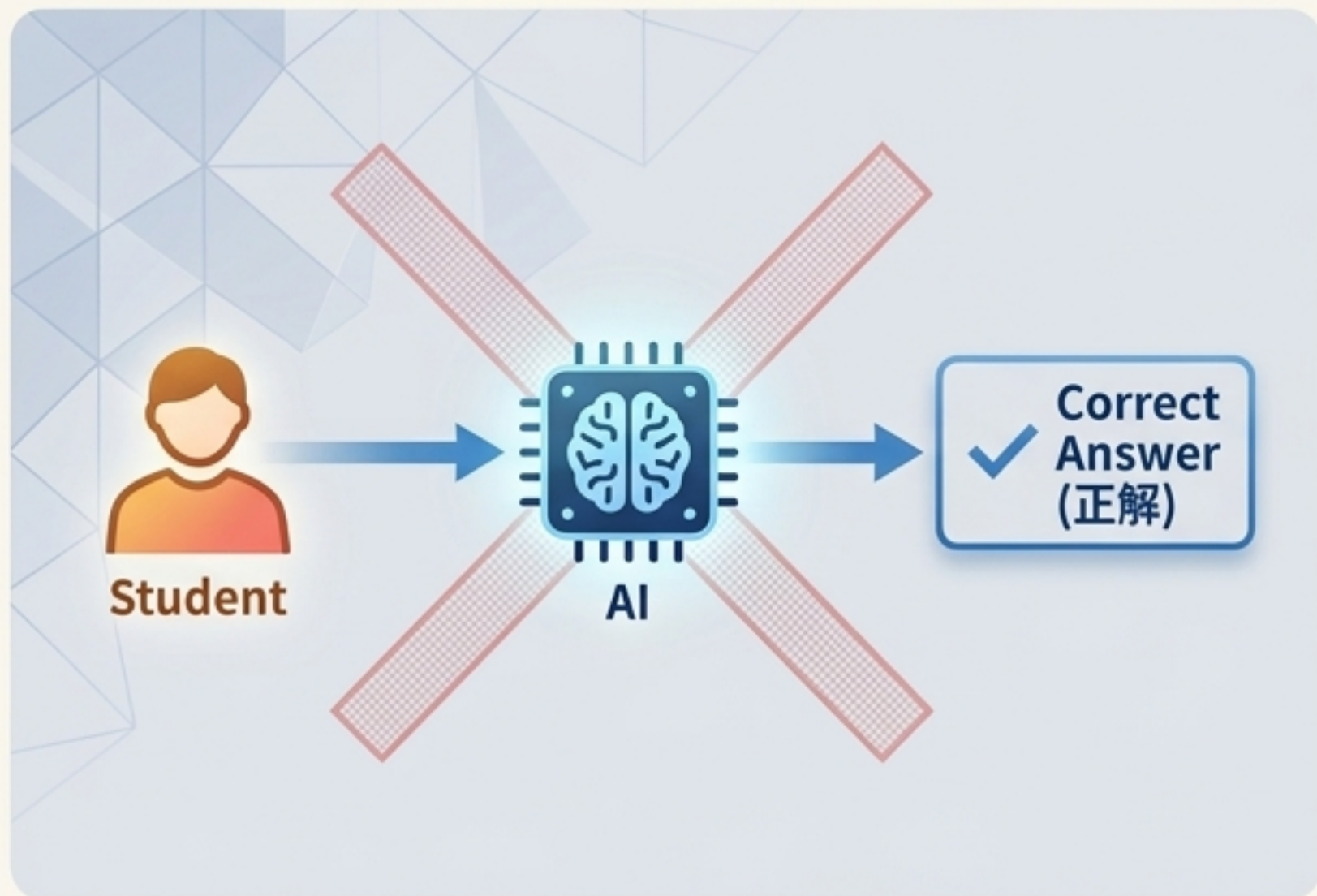
解決策: 経済産業省「未来の教室」実証事業にて、テスト設問・解答素案の自動生成システムを開発。

設計思想

設計思想: 完全自動化ではなく、人間の介入を不可逆的に組み込む。教員がファクトチェックを行うことでハルシネーション・リスクを排除し、品質を担保する。

Layer 2 [B2G/B2B] : 「正解を出す機械」から「思考の壁打ち相手」へ

従来の利用 (Answer Machine)



次世代の協働学習 (Iterative Bouncing / 壁打ち)

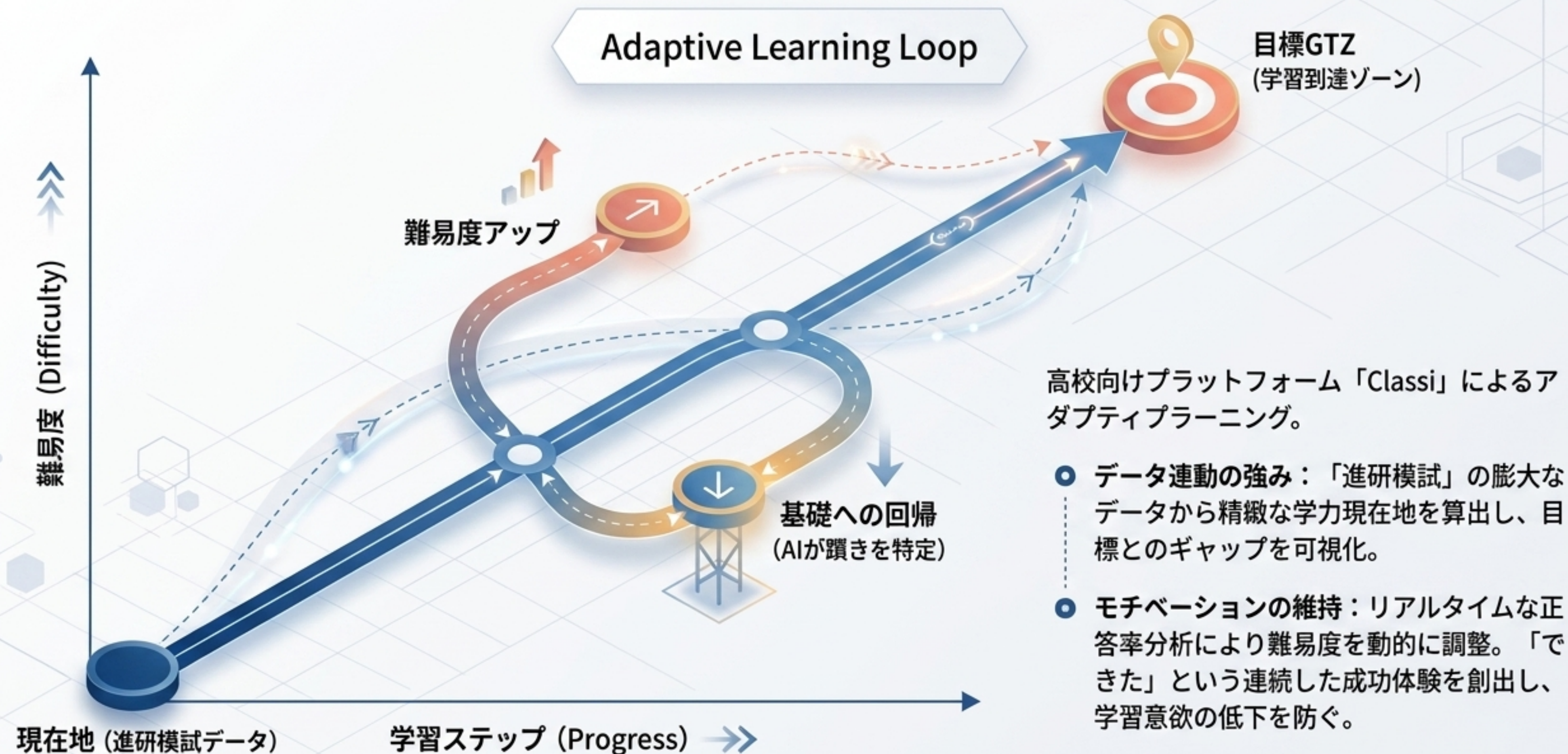


ICTソフト「ミライシード・オクリンクプラス」での実践。

💡 プロンプト技術の提示: 多様な視点を引き出すための「例文シート」を活用。

🧠 協働学習の進化: AIから得た新たな視点をクラス内で共有し、子ども同士の自発的な教え合いと批判的思考 (リフレクション) を誘発する。

Layer 2 [B2G/B2B] : アセスメントデータ連動による「動的・個別最適化」



Layer 3【B2C】：家庭学習における「質問できない」という心理的障壁の打破



1. 「進研ゼミ」の新サービス (2026年3月～提供開始)。












2. 課題: 自宅学習における「保護者に聞いても解決しない」「質問すること自体に気後れする」という孤立状態。



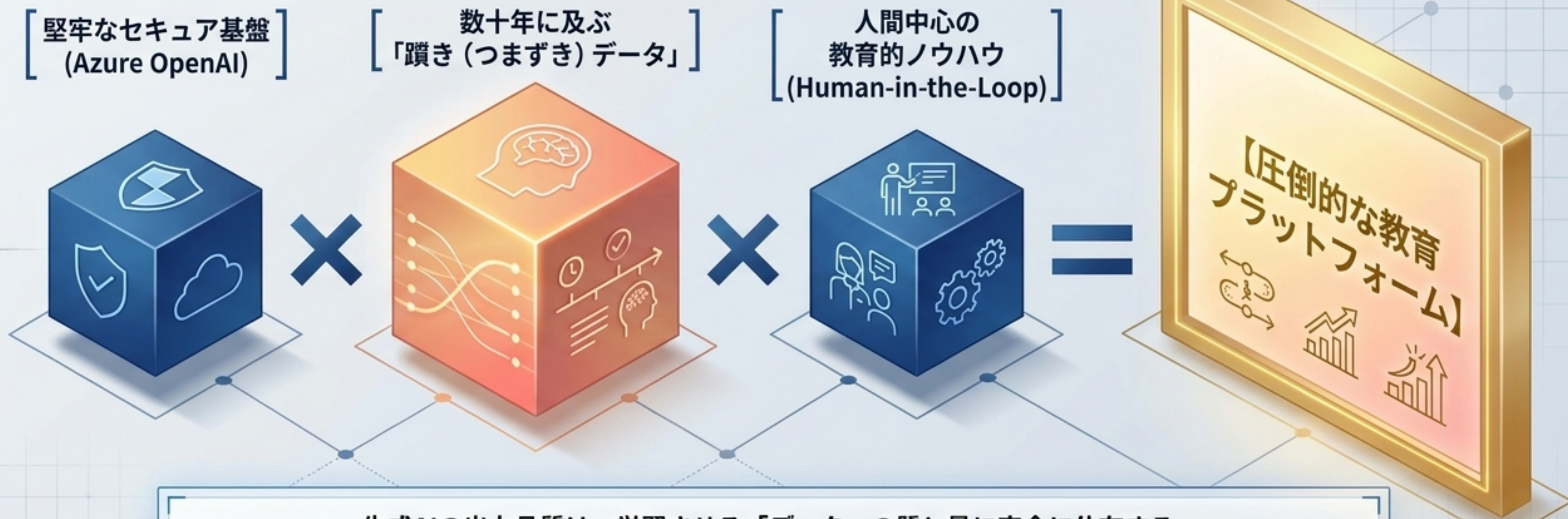
3. 価値: いつでも納得いくまで何度でも質問可能なAIコーチ。長年培った「赤ペン先生」のヒューマンタッチな指導ノウハウとAI処理能力を高度に融合。

生成AI教育プラットフォームの競合マトリクス

 企業・サービス	 コア機能	 対象層	 戦略焦点
ベネッセ (進研ゼミ)	 AI学習コーチ・ ビジュアル解説・ 人×AIハイブリッド 	小・中・高校生	指導ノウハウ×AIによる 自学自習の壁破壊
ジャストシステム (スマイルゼミ)	 24時間質問対応・ リアルタイム添削 	中学生	疑問の即時解決によるテスト 点数向上・志望校合格直結
リクルート (スタディサプリENGLISH)	 双方向型AI英会話	社会人・学生	台本型からの脱却、実践的コ ミュニケーション能力向上

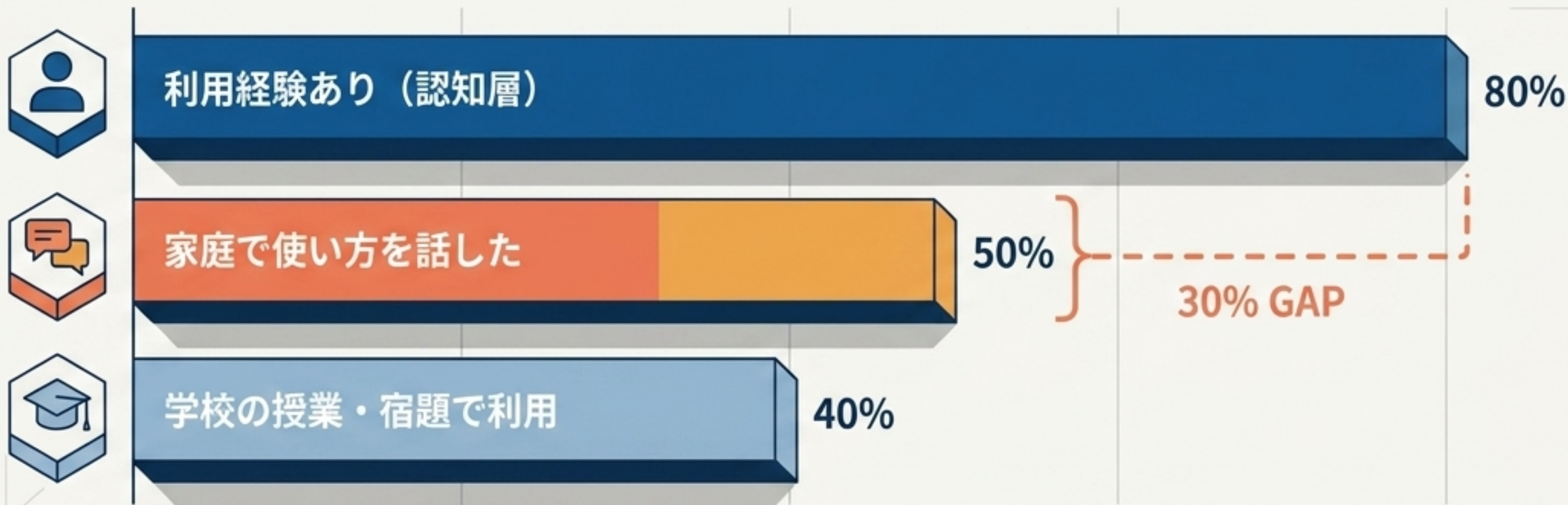
インサイト：各社が「即時性」と「個別最適化」を追求し競争が激化する中、本質的な差別化要因は汎用APIの機能ではなく、その裏側にある「データの質」へと移行している。

The Strategic Moat : 模倣不可能な「データ×人間」の乗数効果



生成AIの出力品質は、学習させる「データ」の質と量に完全に依存する。
ベネッセの真の競争優位性はAI技術そのものではない。
進研模試・進研ゼミを通じて蓄積された、日本の子ども特有の「どこで、なぜ躓くのか」という膨大な行動データ資産こそが、他社の追随を許さない受容的なAIコーチングを実現する。

Layer 4 [Society] : 利用の習慣化と家庭内リテラシーの危険なギャップ



小学生のAI利用はすでにアーリーアダプター層を越え、「習慣化フェーズ」に突入。






利用経験が80%を超える一方で、家庭での使い方に関する対話は約半数にとどまる。



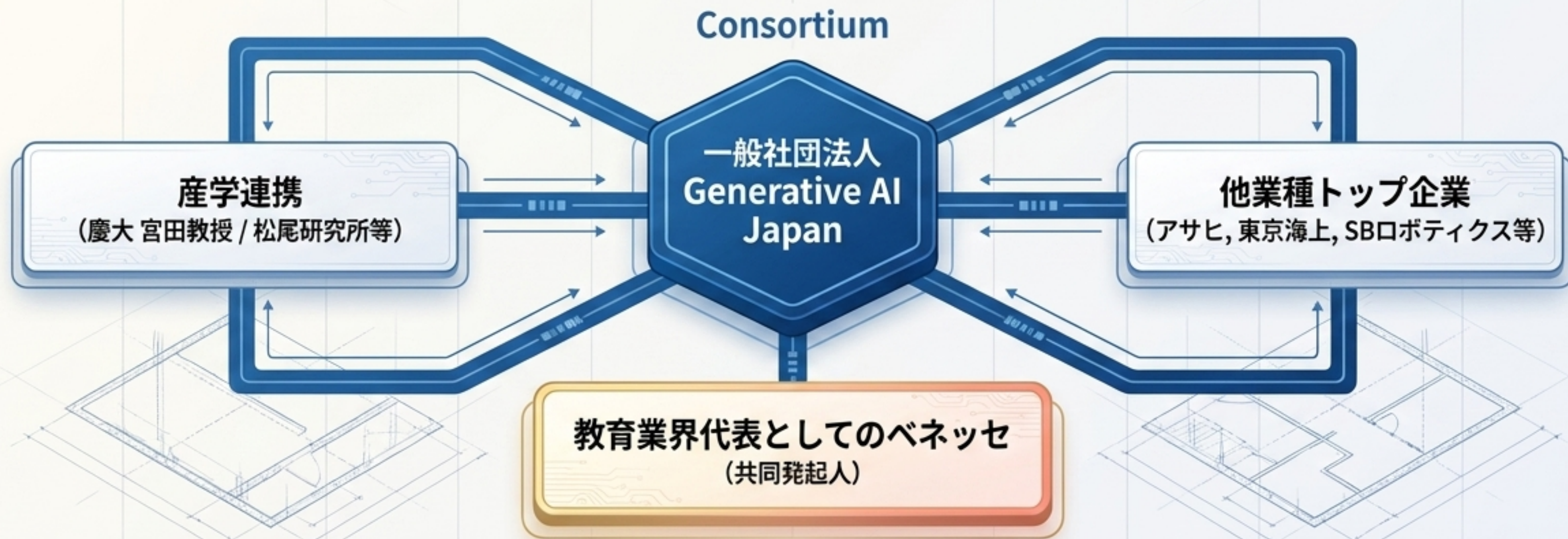
インサイト: プラットフォーマーは単なるツール提供を超え、保護者を巻き込んだリテラシー教育をサービスパッケージとして内包する社会的責任を負っている。

Layer 4 [Society] : 「人間中心 (Human-Centric)」のAI倫理ガイドライン



-  技術がいかに高度化しようとも、ポリシーの中核に「人間の責任」を据える。
-  顧客データの入力禁止や著作権確認など、現場の混乱を防ぐ厳格内部ルールとFAQを整備。
-  コンプライアンスリスクを極小化し、教育機関・社会からの信頼を担保する防衛的インフラ。

Layer 4 [Society] : パブリック・アフェアーズによる能動的なルールメイキング



⚙️ 設立:

2024年1月、Generative AI Japanを共同設立。

⚠️ 背景:

実態に合わない過度な規制や、ガイドライン不在によるリスク高止まりへの懸念。

📍 戦略的意義:

トップダウンの規制を待つ受動的姿勢から脱却。実際のユースケースに基づく「業界標準 (ベストプラクティス)」の確立を牽引し、日本全体の安全なAI社会実装を主導する。

結論：「機械との協働」が導く次世代のWell-being



ベネッセの生成AI戦略は、単なる一企業のDX事例ではない。
堅牢な内生基盤、圧倒的なデータ資産、そして「**ヒューマン・イン・ザ・ループ**」の哲学。
技術的野心と倫理的責任を高度に両立させたこのアーキテクチャは、教育という最も根源的なフィールドにおいて、
「**人間と機械の最適な協働関係**」の青写真 (Blueprint) を社会に提示している。